真鍋昌賢著

浪花節 流動する語り芸 演者と聴衆の近代

細 田

浪花節について多くの論考を されているのである。

本書は、

に、兵藤裕己『〈声〉の国民国家―浪花節 望まれていたものだといえるであろう。浪 が創る日本近代』(二〇〇九年、 花節を研究対象としたものとしてはすで 口承文芸の研究を志す者にとって待ち 講談社学 についてさまざまな角度から論じてきた。

術文庫。初出は二〇〇〇年)という非常に 在でも全く失われていないが、しかしこの 刺激的かつ重要な書がある。その価値は現

ずしも浪花節すべてについて目配りが行き 鮮やかに描いたというべきものであり、必 ついてはまだまだ解明すべきことが多く残 いているというわけではない。浪花節に

流動性が高く、また芸のありようも演者に 浪花節は、本書のタイトルにもある通り

発表してきた著者による初めての単著であ 難をものともせず、これまで著者は浪花節 とすることには困難がつきまとう。その困 がない芸能なのであり、そのため研究対象 よって大きく異なる。まさにとらえどころ

としての魅力は演者に多くを負っているた 当てた論考が選ばれている。浪花節の芸能 本書ではそのうち演者(語り手)に焦点を

書は浪花節における一つの急所をとらえて りだといえるであろう。 め、演者は浪花節を理解する重要な手がか

二代目天中軒雲月という、 右衛門、二代目吉田奈良丸、寿々木米若 対象として選ばれているのは、桃中軒雲 明治期から戦後

の浪花節を代表する四人の語り手である。

それぞれの時代において浪花節の置かれた 歴史的社会的位相が見えてくるのである。

これらの演者に視座を置くことによって、

明 宏

書のページ数を示す)。 容についてみておこう(括弧内の数字は本 備えた七章より成る。まずはその七章の内 および「終章 本書は、「序章 演者論の可能性」を前後に 問題提起と方法意識

雲右衛門の来阪口演を事例として」では 「第一章 衝撃/違和の受容史―桃中軒

「武士道鼓吹」を標榜する雲右衛門は、そ 門(一八七三―一九一六)を取り上げる。 浪花節のイメージを一新した桃中軒雲右衛

期において「無垢で亀裂のない精神の共同 の声が近代国家としての日本が形成する時

日本近代』)。しかし著者は、 体」をつくりあげたと論じられている(兵 藤裕己『〈声〉の国民国家 の陶酔の一方で確実に存在する、 ―浪花節が創る 雲右衛門の声 批判や

揶揄に注目する。

焦点が当てられるのは、一九○七年に大

著者はまず、 阪でおこなわれた雲右衛門の興行である。 浪花節(浮かれ節) 席の見聞 関係は決して一元的なものではなかったの とは事実であるとしても、 浪花節と聴衆の のレコードの収録時間は興行での口演時間 てレコードの録音をおこなってい

る。

当時

して上・中流の人々のものではなかったが、 すなわち当時の大阪において浪花節は、決 衛門来演の直前の大阪のようすを論じる。 は、 良丸の義士伝はいかにして流通したか」で 「第二章 記や統計資料あるいは新聞記事から、

雲右

びたび報じられていた。当時の大阪の人々 浪花節熱を牽引するようすが新聞紙上でた 雲右衛門については、九州において 〈改良〉の機運も高まりつつあった。 問題を扱う。この時代は日本の国産レコー

一方、

ように受容したのであろうか。 では大阪の聴衆たちは雲右衛門をどの あまり浪花 大きな反響を呼んだ。

たのである。

ある程度のイメージがすでに形成されてい にとって、雲右衛門は未知の存在ではなく、

ることで著者は、雲右衛門は聴衆に衝撃を 節に親しんでいない人々の見聞記を検討す

少なからずいたのである。 のさまざまな仕掛けに違和感を覚える者も 方で、従来の浪花節との差別化を図るため う。雲右衛門の声に陶酔する聴衆がいた一 与えると同時に違和感をも抱かせた、とい 雲右衛門の登場

によって浪花節が新しい段階へと進んだこ

和桜』が刊行されたその年に奈良丸は初め

わかるように両者の関係は決して単純なも

れた」と著者はいう

(六五)。そして『大

である 声 のカタチ―二代目吉田奈 フシを効果的に用いて構成し直」すなどの よりも大幅に短いため、「演目の一部分を、

工夫がなされている(六七)。

レコードの登場は、書籍のあり方にも影

義士伝」がどのように流通したのかという 丸(一八七九―一九六七)が演じた「赤穂 一九一〇年代において二代目吉田奈良 響を及ぼした。速記本はレコードを意識し て作られるようになった。さらに、

は語り手と聞き手の関係に大きな影響を及 ド産業の黎明期であるが、 レコードの登場 くはレコードのまねをするための小型本や 稽古本といった出版物も増えた。

ぼした。奈良丸はレコードを多く録音した 浪花節語りの先駆であり、 そのレコードは 繰り返し聞き、 という新しいメディアは、

したのである。 レコードを繰り返し聞いてまねをする

され、口演全体が活字として整頓されつつ 速記本『大和桜義士の面影』(一一三)で ○年から一九一二年にかけて刊行された あった。これらにおいては「フシが視覚化 さて奈良丸の名声を高めたのは、一九一 家・正岡容は、本物そっくりにまねる実力 持ったニセ者をも生み出すことになる。作 という行為は、 本物さながらの口演技術を

ば簡単に論じられるが、 客が少なからずいたという体験談を残して 者と気づいていながらおとなしく聞き入る を持ったニセ者達がおこなう興行で、 る。 肉声と複製された声の関係はしばし 正岡の体験談から

…美文調による格調の高さと読み物として

の完成度を重視した〈速記本〉が構成さ

まねをする聞き手を産み出

複製され

た声を

レコード

おそら

155

のではない。その解明こそ、 口承文芸研究 える大ヒットとなり、米若は「巡業中に聴 した「佐渡情話」は発売されるや予想を超

者は指摘する(七七一八)。 が果たさなければならない役割であると著

寿々木米若と『佐渡情話』の誕生」で 第三章 『新作』を量産する浪花節

象となる。この時代は、一九二五年にはじ (一八九九—一九七九) 一九三〇年代における寿々木米若 の活動が考察の対 が作成された(九九)。このような経緯で

は、

大正期の講談、同時代の戦争物など」の持 義士伝、侠客伝、力士伝、 怪談、 明治・ 響を及ぼしていった時期であった。米若は、 まったラジオ放送が、浪花節にも徐々に影

ちネタに加えて、「一九三○年代から四○ ドに吹き込んだ浪花節語りの一人だった」 年代において最も多くの『新作』をレコー

のである (八四 — 五)。

ドを発売するに当たり、 していた米若は、日本ビクターからレコー おけさ節」を取り込んだ浪花節を作って 一九二〇年代に有望な若手として活躍 出身地新潟の民謡 抒情的に表現するために、土地土地で伝承

なっていた(九四)。このようにして誕生 ラジオやレコードにとっての有力な素材と 欲しいという依頼を受ける。当時民謡は、

こなしつつ、核になる米若らしさを明確に

り、その上で米若は

「広範な種類の演目を

ようにな」り、その必要から興行用の台本 衆から、あるいは興行師から…所望される

誕生した「佐渡情話」は、「民謡・伝説の 両方を取り込んでレコードを前提としてつ 章

くられた語り物」であり、「純朴な恋仲を 出会いが物語を動かしていくきっかけとし あつかった演目である一方で、非日常的な

て埋め込まれて」もいた(一〇六)。

され、米若自身が得意とした明瞭な個性 「佐渡情話」のヒット以降、「米若に期待 記されている『演題帳』が分析対象となる

語の筋」および、「様々なフシ回しの挿入」 は、「若い男女の恋仲を中心に展開する物 すなわち「物語中の人物の心情や状況を…

契約していたレコード会社は「米若の得意 されてきた歌やはやり歌を…入れ込む」こ との二点であったと著者は指摘する。当時 な芸風を意識的にかためていった」のであ

持続的に新作を繰り出していった」の

である(一〇八)。

される。そのことを扱っているのが「第四 を求められるようになって変化を余儀なく 国家総動員法が公布され戦時体制への協力 しかしそのような状況も、一九三八年に 総力戦下の浪曲師―横断する米若の

口演空間」である。この章では、一九四〇

年一月から一九五一年一二月までの間に、

米若がいつ・どこで・何を口演したのかが

に読む者)の口演がおこなわれた。 である米若の二席口演と前読み(座長の前 なお米若の巡業においては基本的に、座長

時下の興行、レコード、ラジオにおける米 れる」と指摘する(一三四)。その上で戦 新しい演目が加えられてゆく様子が読み取 者は、「既出の演目を軸としつつ、徐々に 『演題帳』に記された演目を分析した著

若の演目について、「物語世界の設定を『戦 よび「設定を江戸期・明治期などの過去に Þ 『銃後』にした…〈同時代物〉」お

した…〈時代物〉」という独自の分析概念

は、 と呼ばれる新作群が作家によって作られ上 浪曲をめぐる葛藤-分析をおこなっているのが 演された。それらの作品についてテキスト れた。浪花節も例外ではなく、「愛国浪曲」 た (一四五一六)。 ドとは異質の演目選択」がおこなわれてい いレパートリーであり、「ラジオ・レコー 入」し、〈時代物〉は相変わらず欠かせな 興行においては「芸を売るための方針が介 していた。いっぽう口演活動の軸であった たが、それには「国家の論理が顕著に影響」 されたのはほとんどが〈同時代物〉であっ れなかった演目」もあった。ラジオで放送 には「短命に終わった演目や興行にかけら ては新作を絶えず発表していたが、その中 ている。すなわち米若は、 が (一三五)を用いて考察し、 さて戦時体制の中でもとりわけ一九四〇 を分析するための視点_ 愛国浪曲には「『国民』 …日常生活の基盤となる人間関係に 演芸への統制がいっそう強めら ―ポピュラーな レコードにおい 「第五章 である。 としての義理 次の結論を得 語り 著者 愛国 連続な側面もあった。しかし米若は戦後も るが、著者は連続性にも注目するのである。 じられる。戦時期から戦後期への移行にお て、米若の『演題帳』を手がかりにして論 (一七八)。 たのしむこともまた可能だった」のである 手は「たのしめない原因である『国民』と 最もたのしみにくいタイプの浪花節であ 埋め込まれ」ており、 で同様に巡業を中心とした毎日を送ってい 下/占領下の連続性と非連続性」では、 よって明らかになる。著者によれば、 な思惑に沿ってのみ聞いていたわけではな る」と指摘する。 ては、上演が禁止されたものもあるなど不 たことを指摘する(一九一)。演目につい よって、終戦後においても米若は、それま いては、しばしば不連続性のみが強調され 時期から戦後期への移行という問題につい しての〈義理〉を回避しつつ、その物語を かったことが、著者による聞き取り調査に 第六章 まず著者は 繰り返される『情話』― 演題帳 しかし聞き手がそのよう 「押し付けがましく、 を分析することに

> ŋ 期待や統制とどのように対峙したかを記 認められる (二〇五一六)。そして著者は ていると想定される特徴」を盛り込んでお 中心にした展開」や「〈俗謡〉の挿入」と おいて米若は、 述・分析していく作業」の重要性を強調す 「演者が客受けを内面化しつつ、諸制度の いった、「自身が得意とし、 戦時期から戦後期にかけての連続性が 戦前と同じく「若い男女を かつ求められ

相変わらず新作に取り組んでいた。

聞き

る。(二一六)

戦時 戦

いる。 は、一九三〇年代半ば以降における代表 二代目天中軒雲月の演じ方につい おける男/女という境界について考察して (一九〇九―一九九五) が得意とした「七 的な女流浪曲師である二代目天中軒雲月 つの声」という演出を取り上げ、浪花節に 「第七章 戦時下に響く『七つの声』― 、て」で

る。 出演しているかのように思わせる演出であ 彩な声を出すことであたかも複数の 雲月が得意とした「七つの声」 従来の価値観からすれば語り物の本道 は、

ちを惹きつけた (二五一)。その「七つの 花節において、女流が女を語るというチャ ていった」のである。そして著者は、「浪 割を語ることと深く関わりあって錬磨され つの声」は、「戦時下において、銃後の役 後の女性を描く新作を多く上演する。「七 声」を駆使して彼女は、戦時において銃 が、雲月はファン層の外側にいた聞き手た を外れるものとされる「七つの声」である げているといえる。とりわけ聞き手がどの 位相を見ようとするものである。著者はこ 取する活動のうちに浪花節の歴史的社会的 上げることによって、説得力のある結論を チするのは難しいものだが、著者は見聞記 ように聞いているかという問題にアプロー の困難な課題に取り組み、十分に成果を挙 や聞き取り調査などから丹念に事例を拾い た 『演題帳』については、記載内容以外の

三五三。 月は象徴的に担っていた」と結論づける

ンネルが構造化されていくプロセスを、雲

うものである。とりわけ口承文芸研究者に 示唆に富む内容となっているといえるだ とっては、方法論をはじめとして非常に を持っており、多くの読者を得ることを願 このように本書は多くの興味深い内容

ある。

個々の演者の上演および聞き手がそれを聴 を構成することを意図したものではなく、 本書は決してマクロな視点から浪花節史 ろう。

アの複雑な関係を描き出すことにも成功し さらに本書は、浪花節の演者とメディ 導き出している。

ディアの登場は、演者と聞き手の関係を多 た、音声を遠隔地に届けることが可能なメ ている。とりわけレコードやラジオといっ

ありように変化を迫るできごとだったので 演の場の拡大ではなく、浪花節そのものの 元的なものとした。それは決して単なる上

ものであり、 本書における論述は節度を保った堅実な 信頼が置ける。ただしいくつ

説明があってもよかったのではないかとも かのことがらについては、もう少し詳しい

思われる。たとえば米若の上演演目を記し

書いておいた方が読者の理解の助けになっ ジを持ちにくい。おそらくは不明な点が多 前か後か)などがわからず、明確なイメー ては作成目的や記入のタイミング 情報がほとんどない。そのため読者にとっ いのであろうが、ある程度の推測も含めて (上演の

るプロセスなどについても、もう少し踏み たのではないかと思われるのである。 また新作物の位置づけや演目が決定され

択されるに当たって作用する重要な要因の

込んだ議論が望まれる。これらは演目が選

密接に関係するはずである。今後それらに ついても研究を進めていただきたいと願う 一つになりうるものであり、本書の内容に

二〇一七年三月 せりか書房刊 本体 次第である。

三六〇〇円

(ほそだ・あきひろ/帝京大学)